



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.6

2017

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

仏教は6世紀に日本に伝わりました。浄土真宗は親鸞聖人(1173-1263年)によって築されました。英語では“Shin-Buddhism”と呼ばれることがよくあります。このShinは浄土真宗の真で、真実を意味します。仏教は、差別や条件無く、全ての人の為であると説いています。

道を求めるころ (3)

雪山童子の求道

岡本英夫

「天人」というのは仏教が生まれる遥か何千年も前からインドの思想、土着の考えの中にあっただのですが、それを仏教は自らの考え方の中に取り入れていくわけです。仏教を守る守護神、仏教を守護する役割を担って新たに登場してくるわけです。ここで言えば菩提心に生きる人、即ち雪山童子なのですが、このような仏教に生きる人を守護していくというのが天人の役割です。天人の登場の仕方というのは非常に面白いところですが、今はその人が本当に人々の為に生きることができる人かどうか、試してみようというわけです。

「帝釈天は自ら身を変えて、恐るべき羅刹(らせつ)となって地上に下りて雪山に到り、雪山童子から遠からぬ所に立った。」

天人は羅刹という鬼に姿を変えます。ここが大きなポイントですね。雪山童子は坐って瞑想しているわけです。真実とは何かを考えているのでしょう。その所へ羅刹に姿を変えた帝釈天が近付いて行くわけです。

「そこで、過去仏が説くところの半偈を述べる。"諸行は無常なり

是れ生滅の法なり"」

諸行は無常、すなわちこの世のもの全ては無常であると。永遠に変わらないものはない。あらゆるものは移ろい変化してゆく。永遠にその形をとどめるものはないのだと。この諸行無常ということがこの世の道理、生滅の法である。この世はあらゆるものが生まれ、そして滅して、



木のもとのお話(6)

浄土真宗

浄土真宗の「浄」は清らかである、けがれの無い、という意味です。「土」はつち、地面です。英語、ドイツ語に訳する時、「土」を「Land」とすることがあるようです。「Land」は「土地」ですから、これでもいいのですが、「国」という意味もあるので誤解を招くようです。

「きよらかな国」ということになると、どこかそのような特別な場所や、死んだ後に行くところであるというように受け取れるからです。ですから英語ですと「pure ground」の方がいいかも知れません。

転回してゆく。その転回の法を貫いている法則は諸行は無常ということだと。

ですからこの言葉で、この世の全てを貫く法則が明らかにされているわけです。一体この世とは何なのだろうと尋ねている人に対して、諸行は無常だと答えれば、なるほどそうだったのかということになる。この世の法則、真の姿を明らかにしたことばというわけです。

「童子はこの半偈を聞いて、心に歓喜を生じ、座より立って、手をもって髪をあげ、四方を振り返り、今の偈は誰が説いたのかと言った。しかし、そこには誰もいず、ただ羅刹の姿を見るだけである。」

半偈を聞いてとありますが、半偈とは「諸行は無常なり 是れ生滅の法なり」のことばです。「偈」というのは「うた」です。インドでは偈と言いますね。今聞いた偈は全体の半分にすぎないと童子は思ったのです。真実を求める童子の素晴らしい感覚ですね。この世の真理を適格に表しているのは確かだが、しかしこれだけではないはずだと。この世はこのような世界である、なるほど。ではその世界をどのように生きてゆけばよいのか。当然それが問題となる。それはまだ述べられていない。これに続く後の半偈があるにちがいないと。それがないと全体が完成しないはずだと童子は思ったのですね。

童子はこの半偈を聞いて心に喜びがおこってきた。それはそうですね。この世の真理を明らかに知らされたのですからね。しかし、そこでとどまらず、なにをしたのでしょうか。

大きな流れからいえば、童子は立ち上がって、前の半偈を説いた者を探し、後の半偈を聞こうとするのです。その相手は帝釈天が姿を変えた羅刹なのです。怖く醜い羅刹から後の半偈を聞き、自分が求めている真実の教えがそれで全部尽くされ、大いに喜ぶというように展開していくわけです。それはもう少し先に出るのですが。要するに後の半偈を聞いてゆくために、童子は何をしたかが問題となるところです。ここに直接、「道を求めるころ」が表れているように思えます。

まず、喜びがおこるということ。一つの教えを聞いて喜びがおこる時もあるれば、おこらない時もあるでしょう。しかし、ここで問題にすべきは、一口に言って「真実とは何なのか」と、自分がこの人生を生きてゆく一番大切な真実とは何なのかということとを少しでも尋ねておれば、それに関する言葉に出会えば、「ああ、そうだったのか」と、やっと会うべき教えに会うことができたという喜びがおこるわけですね。

ですから、前の半偈を聞いて童子が喜ぶことができたのは、それまでずっと彼が求めていたということがあったからでしょう。真実は、求める者の上に現れるということでしょうか。

(続く)

